

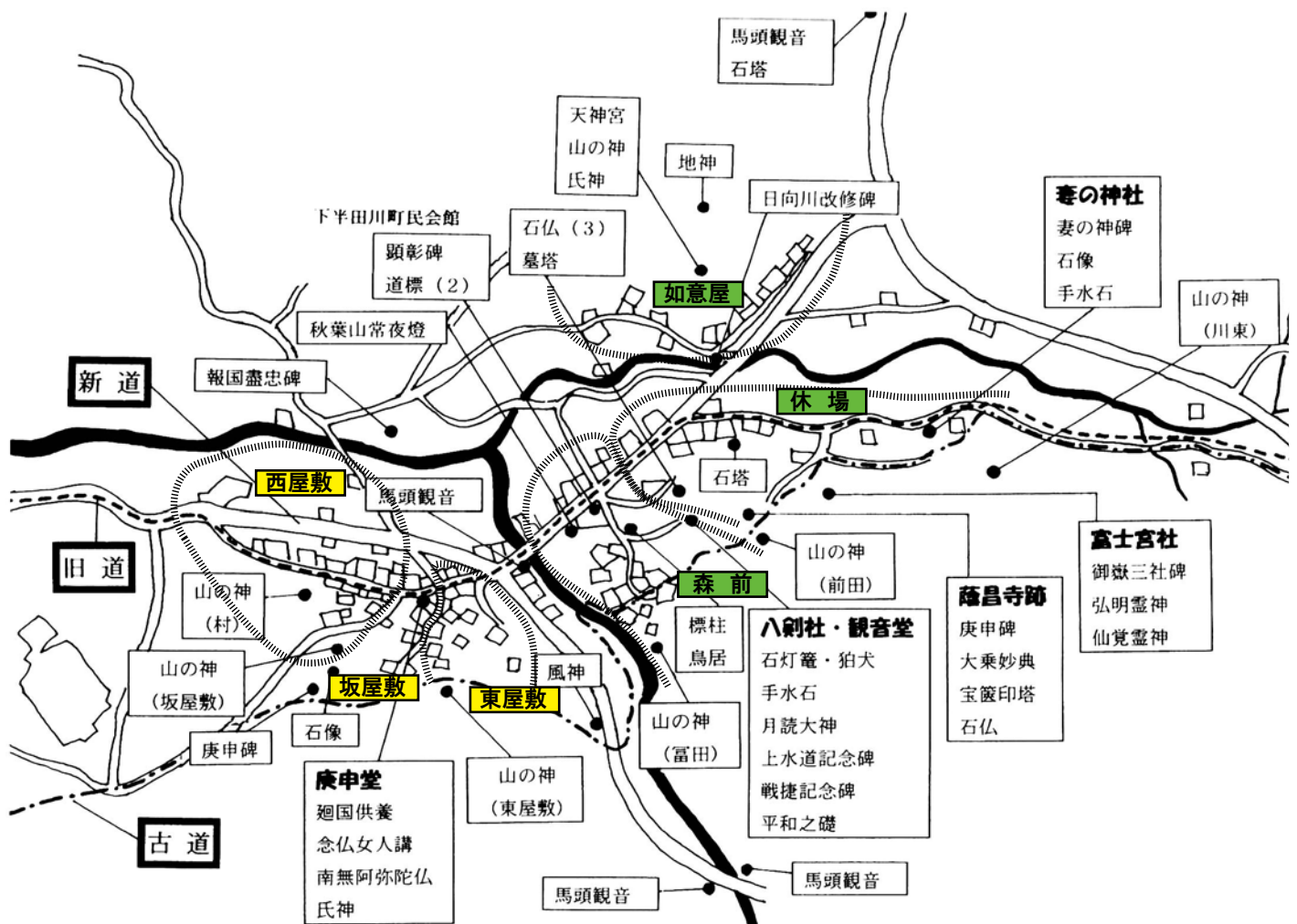
歴史文化基本構想ワークショップ

瀬戸の魅力再発見 まちめぐり Part 3 掛川地区（下半田川）

瀬戸市交流活力部文化課

平成28年1月24日(日)

- ①^{こうしん}庚申堂→②^{はたがわ}伝代官屋敷跡（秦川城跡）→
③オオサンショウウオ人工巢穴→④^{いしやうじ}蔭昌寺跡・^{めいげつあん}明月庵跡→
⑤^{はちけん}八剣社→⑥阿弥陀如来立像・十一面観音菩薩立像・観音堂



下半田川の石造物とシマ

(松原 脩 2002「下半田川」『瀬戸市史民俗調査報告書二』より作成)

① 庚申堂（明治 10(1877) 年～）

川西の坂屋敷にある庚申堂は、明治 10(1877) 年前後にコレラ・はしかが全国的に大流行した折、村を疫病から守ってもらうために建てられたものと伝えられています。

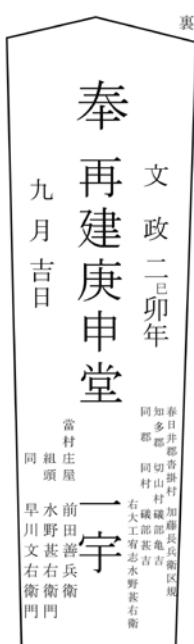
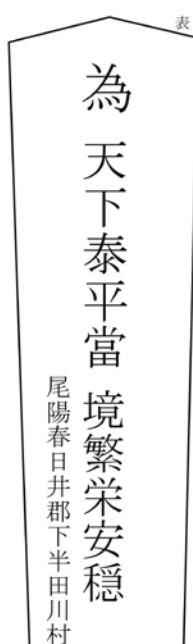
堂宇は、2 間×2 間の側柱建物で、屋根は寄棟となっています。もともとは萱葺でしたが、平成 9 年にトタン葺きとしています。南側に開口し、入口は上半が内上げの蔀戸（半蔀）となっています。



坂屋敷の庚申堂

現在堂内には 2 つの祠状の内陣があり、2 枚の棟札が納められています。

棟札は、文政 2(1819) 年に再建されたとするものと、昭和 40 年に修理されたとするものが確認されます。現在の庚申堂の東側には、礎石らしき石材や平場もあり、他に村内には庚申堂が建てられていた記録や伝承もないため、江戸時代以前にも庚申堂がこの地に立っていた可能性が高いと思われます。



庚申堂棟札（文政 2(1819) 年再建）

② 伝代官屋敷跡（15 世紀末～ 17 世紀前葉）

川西の東屋敷の山裾には、江戸時代よりも古い時代に古道があったと言われている。その古道沿いに、「秦川城跡」およびそれに付随する「代官屋敷」と呼ばれる平坦地が所在します。江戸時代の村絵図（寛永 4(1643) 年、天保 12(1829) 年）にも、南側の山中に「櫓場」と呼ばれる場所があります。1923 年刊行の『東春日井郡誌』には、「尾関 秦」という美濃池田城主安藤景照の家臣で、天正年間（1573～92）に下半田川村に住した武士がおり、安藤氏に従い長久手の戦い（天正 12(1584) 年）で戦死したとする伝承が記録されています。

「代官屋敷」と伝えられる地点は、「尾関屋敷」「殿様屋敷」とも呼ばれ、山中腹の秦川城を守った尾関氏の屋敷地であったと考えられますが、現在残る石垣が当時のものであるか詳細は確認されていません。

③オオサンショウウオ 国指定特別天然記念物



世界最大級の両生類オオサンショウウオは、日本固有種であり国の特別天然記念物に指定されています。ヨーロッパでは、既に絶滅し約2,300万年前の地層から化石が発見されていましたが、江戸時代後期に来日したシーボルトにより伊賀(現在の三重県)に生息するオオサンショウウオが確認され、化石の時代から姿が変化していない「生きた化石」とも称される生物です。その生息地は岐阜県東白川村や愛知県瀬戸市を東限として西日本に分布しており、成体の体長は70～80cmに及び、中には1mを超えるものもみられます。自然環境の良好な山村の清流に生息しています。

瀬戸市の蛇が洞川流域では、平成3年瀬戸市理科教育研究会により初めてオオサンショウウオが確認され、河川工事に伴う調査や東山動物園の調査、NPO「名古屋水辺研究会」の勉強会、「サンショウウオを愛する会」(平成24年度から「瀬戸オオサンショウウオの会」となる)の保護活動などを通じてその存在が明らかとなり、平成18年から3年間瀬戸市が国庫補助を受けて生息分布調査を実施しています。平成23年には「第8回日本オオサンショウウオの会 瀬戸市(愛知県)大会」が瀬戸市の瀬戸蔵・下半田川町・東山動物園を会場に実施されました。

オオサンショウウオは、冬眠をせず年中活動をしませんが、主に夜行性で日中見かけることはあまりありません。7月頃から繁殖期に入り活動が活発化し、9月に川岸の巣穴で産卵します。産卵後の巣穴はオスの「ヌシ」が守り、40～50日後に孵化して幼生が誕生、2月から3月にかけて幼生は巣穴から川に出て巣立ちします。

オオサンショウウオの一年

オオサンショウウオの産卵は8月下旬から9月上旬にかけてです。1頭のオスが占有している産卵巣穴にメスが入り、続いて、巣穴の周辺に集結した他のオスも入って、1頭のメスと複数のオスで産卵行動をおこないます。私たちは巣穴を占有しているオスを「ヌシ」と呼んでいます。



(産卵後まもなくのヌシと受精卵 (平成25年9月26日))



(産卵から約21日後 (平成25年10月11日))



(孵化後4ヶ月あまり L=4.5cm (平成28年1月13日))



(産卵後1ヶ月あまり (平成25年9月26日))



(孵化後1ヶ月あまり L=3.1cm (平成25年11月7日))



(孵化後1年程 L=8.5cm (平成27年9月4日))

④ 蔭昌寺跡・明月庵跡

④-1 蔭昌寺跡（15 世紀末～17 世紀前葉）

蔭昌寺は、延徳 2(1490) 年に創建、開山は定光寺老師の観空公禅師で、元和 8(1622) 年に外之原村（現在の春日井市）に移ったと伝えられています。外之原村には定光寺末寺の長慶庵が正保 4(1647) 年にはあったと定光寺『由緒略記』に記され、その長寿庵の地に蔭昌寺から移された「臥牛山 林昌寺」が今日まで続く寺院となっています。

現在は、寺院の堂宇は残されていませんが、下半田川の集落を見下ろす尾根上に寺域の平場と宝篋印塔などが残されているのみです。宝篋印塔は、「宝篋印陀羅尼經」を納めて供養する石塔として鎌倉時代初期に成立しましたが、後に墓碑塔や供養塔として建てられる例も多くありました。蔭昌寺の宝篋印塔は、2 基確認され、やや小ぶりの硬質砂岩製のものと、花崗岩製のものとがみられます。ともに記念銘等が書かれていないため、由来については詳細不明ですが、「関西式」宝篋印塔として知られ、近隣の美濃・三河にも類似した事例があり、明徳癸酉（1393）年銘の岐阜県多治見市根本町の宝篋印塔等から 1400 年前後の年代に作成されたものと考えられます。伝承の年代よりも遡る年代ですが、延徳 2 年以前からこの地が寺院等であったことがわかります。



蔭昌寺跡の宝篋印塔・無縫塔



花崗岩製宝篋印塔（左側）



硬質砂岩製宝篋印塔（右側）

の美濃・三河にも類似した事例があり、明徳癸酉（1393）年銘の岐阜県多治見市根本町の宝篋印塔等から 1400 年前後の年代に作成されたものと考えられます。伝承の年代よりも遡る年代ですが、延徳 2 年以前からこの地が寺院等であったことがわかります。

同所にある花崗岩製宝篋印塔も笠の四隅にある隅飾が垂直に立ち上がる 14 世紀を中心としたものであることがわかります。

参考文献

富田幹夫 2015「蔭昌寺の宝篋印塔」『やまびこ第 13 号』
掛川地域力向上委員会

④-2 明月庵跡（19 世紀）

蔭昌寺の西側麓、八劔社の南隣に、石垣が築かれた平坦地があり、ここに享和年間(1801～04)に阿弥陀堂（明月庵）が建立されたと伝えられています。蔭昌寺が外之原村に移った後に村に尼僧を迎えたもので、前述の蔭昌寺宝篋印塔の隣に文化15(1818)年から嘉永6(1853)年にわたり建てられた5人の尼僧の花崗岩製の無縫塔が並んでいます。無縫塔は、基礎の上に請花をのせ、その上に丸みをおびた長い卵形の塔身をのせるもので、僧侶の墓碑として建てられたものです。

その後、無住となり庵も焼失してしまったようですが、明治16(1883)年には、沓掛小学校より分かれた下半田川分校がここに開校し、東側尾根上の蔭昌寺跡の平場は、運動場として用いられたようです。小学校は、明治30(1897)年まで使われていました。

⑤ 八劔社

下半田川村の氏神社である八劔社の創建年代は明らかではありませんが、境内最古の石燈籠は貞享2(1685)年造ですので、それ以前から拝殿が建てられていたようです。熱田神宮の別宮に由来し、秋葉社・愛宕神社・津島社なども合祀されてい



ます。かつては、秋の例大祭には川東・川西・青年会から3頭の献馬奉納がなされ、火縄銃や棒の手も出て、賑わったそうです。

⑥阿弥陀如来立像・十一面観音菩薩立像・観音堂

⑥-1 阿弥陀如来立像(12世紀前半)県指定

下半田川観音堂には2体の平安時代の仏像が祀られていた。昭和48年以降には、それぞれ厨子の中に納められ、観音堂右手の文化財収蔵庫に安置され今日に至ります。

右手の厨子内には、円形の頭光を光背として伴い、蓮華座の上に立つ阿弥陀如来像(像高98.4cm)がみられます。これらの付属物は、後世に補われたものですが、12世紀前半の制作と考えられる体幹部はヒノキ材の一本造りで、内刳りはされていません。

左手は垂下させて掌を下に向け親指と人差し指で輪を作る印(「上品(じょうぼん)」の印)、右手は胸の脇で掌を立てて上品の印を結んでおり、いわゆる上品下生(げしょう)の「来迎印」(らいごういん)をとります。首は三道相(ふくよかさを示す3本の線)で、額の白毫(びやくごう)は石製(緑色(後世の補修))、肉髻(にっけい)珠も石製(赤色(後世の補修))がみられます。上半身は偏衫(へんさん)、下半身は巻スカートのような裙(くん)を着て、それらの上に袈裟を纏います。

本像は、同所の十一面観音菩薩立像と比べ、衣文表現の意匠化と形骸化が進み、体

※ 部の量感も減じていることから、やや時期が下がり、12世紀前半の造像と考えられます。表面の痕跡から、当初は前面に白色下地を施し、彩色仕上げしていたと考えられます。



阿弥陀如来立像
下半田川町観音堂(瀬戸市)12世紀前半制作

⑥-2 十一面観音菩薩立像(11世紀後半) 県指定

収蔵庫左側の厨子内には、阿弥陀如来立像と同様、後世に補完された円形の頭光を光背として伴い、後世に補完された蓮華座の上に立つ十一面観音菩薩立像(像高111.3cm)が安置されています。額上の宝冠(ほうかん)は失われていますが、頭の上に10面(髻頂に1面、側から後面に9面(後ろの3面のみ当初のもの))の仏面、正面に化仏立像がみられます。腰をやや左に捻り、右膝をやや前に出した立像で、ヒノキの一材より彫りだし、内削りは施していません。

垂下する左腕は折り返して水瓶を胸の前で執った形、右腕は全体を垂下させて掌をやや外に向け全指を軽く伸ばします。後世に補われた銅製の胸飾、二の腕につけられた臂釧(ひせん)、手首に着けられた腕釧(わんせん)の表現がみられ、上半身の肩から腰に掛けて条帛(じょうはく)がみられ、両腕には天衣(てんい)が掛けられています。下半身には巻スカートのような裙(くん)を着て、表面には3条の天衣が横切っています。

やや下膨れの穏やかな表情の顔立ちで、腹部がやや張り出すなど、奥行のある造形となっており、量感に富んでいます。一方、浅く穏やかな衣文表現を考慮すると11世紀後半の造像と考えられ

※
ます。本来は、肉身・頭髮・着衣ともに白色下地を施し、彩色仕上げであったとみられますが、現状では彩色はほとんど剥落しています。



十一面観音菩薩立像
下半田川観音堂(瀬戸市)11世紀後半制作

【参考】平安時代の十一面観音菩薩像（木造）

8世紀末～12世紀後半の平安時代には、仏像彫刻も多様な変遷をたどります。平安時代前期の9世紀代のものは、密教の影響下で肩が張り気味で頭部幅や奥行が大きく丸みが強く頂上仏面も大きいのに対し、中期の10世紀代のものは頭部がやや小さくなり体部は肉身の自然な起伏を柔らかく表すようになります。後期の11世紀からは浄土教思想を背景に定朝（じょうちょう）様式が広くみられるようになり、浅い彫りと併行して流れる衣文と瞑想的な表情による定型的な和様彫刻が確立しますが、徐々に形骸化します。



十一面観音菩薩坐像
賢林寺（小牧市）9世紀後半制作



十一面観音菩薩立像
密蔵院（春日井市）9世紀末～10世紀初頭制作



十一面観音菩薩立像
笠覆寺（名古屋市南区）11世紀初頭制作



十一面観音菩薩立像
長慶寺（豊田市）12世紀前半制作



阿弥陀如来立像
宝勝院（名古屋市熱田区）貞永元（1232）年制作

十一面観音菩薩立像
宝樹院（常滑市）13世紀中葉制作

⑥-3 観音堂

2体の木造仏が永らく安置されていた観音堂は、3間×3間の規模の萱葺建物です。堂の創建年代は不詳ですが、後背山中にあったものが、元禄4（1691）年に現在地に移された伝承があり、享和元（1801）年に再建されました。平成9年には屋根をトタン葺きとしています。

享和元（1801）年銘棟札

表面人名「願主惣村中・庄屋・早川彦三郎、組頭・安藤治兵衛、同・前田喜兵衛、應夢山下金溪軒祖廉謹誌」

裏面人名「本州知多郡桐山村住・大工久

保忠左衛門尉藤原易要、同久保弥左衛門尉藤原重喜、同久保善兵衛尉藤原氏、同久保弥七郎尉藤原氏、當村住人・木挽安藤長吉、同藤七、同善之右衛門、同甚蔵」

参考文献

掛川公民館 2000『下半田川町の古道』平成11年度掛川公民館生涯学習講座

愛知県史編纂委員会 2013『愛知県史 別編 文化財3 彫刻』

※本資料中、※のついた画像は、愛知県史各頁より引用。他は瀬戸市文化課撮影



観音堂近景
下半田川町 19世紀初頭再建

